

福山平成大学経営学部紀要  
第14号(2018), 1-18頁

## 序から見た『西湖修禊詩』 —清代杭州詩会の記録—

市瀬 信子

福山平成大学経営学部経営学科

**要旨**：修禊とは、三月三日に川辺で不祥を払う行事である。永和九年(353)、王羲之が蘭亭で修禊の詩宴を開いて詩集を編み、そこにつけた序が「蘭亭序」として名を馳せて以後、修禊は文人雅集の一つとして広く行われるようになった。しかし、その都度詩集が編纂された形跡はあるものの、詩集として現存するものは少ない。その中で、修禊の詩集をそのまま伝える数少ないものの一つが、乾隆十一年、杭州西湖での修禊を記録した『西湖修禊詩』一卷である。『西湖修禊詩』は、修禊の記録として貴重であるだけでなく、地方での詩会の実態を知る手がかりともなるものでもある。西湖修禊は、官僚が主催し、浙江の詩人が参加した詩会である。詩集には官僚鄂敏と、詩壇の長老周京の二人の序があり、これらの序は、浙江という一地方の当時の位置づけと、その地における官僚の役割、地域の詩人の意識とを伝える資料でもある。そこで本稿では、この二つの序をてがかりに、西湖修禊が何の為に開かれ、なぜ記録されたかに迫ってみたい。

**キーワード**：杭州、修禊、序

### はじめに

清代杭州の詩人達は、無位無官のまま他郷に流寓し、当地の詩壇で唱酬に参加し、一時の隆盛を各地の詩壇にもたらした。とりわけ清代の康熙年間の終わり頃から乾隆年間の前半までが、そうした詩会活動の盛んだった時期である。やがて詩人達は、相前後して帰郷し、今度は故郷杭州で詩会を行う。その時期の記録の一つが「西湖修禊詩」である。

修禊は、三月三日に水辺で禊をする古くからの行事であるが、永和九年(353)王羲之の蘭亭の会以来、詩会の場として定着した。蘭亭の会については詩集に編まれ、後世に記録が残ったが、ほとんどの修禊は詩集として保存されることがなかった。印刷が盛んになった明清時代に、詩会の詩が盛んに出版され、修禊の詩も同様であったと推察される。しかし、いずれも一時的なものとして扱われることが多かったと思われ、後世に残されたものは少ない。そうした数少ない詩会の記録の一つが『西湖修禊詩』である。なぜこの記録が残されたのか、その意味を明らかにすることは、当時の詩会と記録の関係をj知る上で重要である。そこで『西湖修禊詩』を題材として、杭州詩会の記録について考察してみる。

## 1. 修禊と詩の記録

修禊とは、古来三月上巳の日に不祥を払う行事であった。後に三月三日が修禊の日として定着し、また不祥を払う行事に、宴会が伴うこととなり、やがては宴会の比重が大きくなった。宴に詩を詠ずることが加わり、やがて修禊は詩人達の詩宴として定着する。<sup>1)</sup> 修禊と詩宴が強く結びついて意識されるようになったのは、東晋の王羲之（303-361）が、会稽内史であった時に、蘭亭で開いた詩宴以後のことであろう。この詩宴の詩がまとめられ、王羲之がその序を著し、孫綽が後序を著して詩集とされた。『雲谷雜記』一に「予嘗得蘭亭石刻一卷、首列羲之序文、次則諸人之詩、末有孫綽後序。（予嘗て蘭亭石刻一卷を得るに、首に羲之序文を列し、次には則ち諸人の詩、末に孫綽後序有り。）」とあるように、序文、参加詩人の詩、共に記録され、後世に広く伝えられることとなった。王羲之に蘭亭の会を記録しようという意志があったことは、蘭亭序の最後に「故列叙時人、録其所述。雖世殊事異、所以興懷、其致一也。後之覽者、亦將有感於斯文。（故に時人<sup>おもむき</sup>を列叙し、其の述ぶるところを録す。世殊なり事異なると雖も、懷いを興す所以は、其の致一なり。後の覽る者も、亦た將に斯の文に感ずる有らんとす。）」と、後世の読者を意識していることからわかる。それには詩人と詩を含む詩会そのものの記録としての詩集である必要があった。釜谷武志は、修禊の詩の中で「蘭亭詩」が残ったのは、「蘭亭集」にまとめられたがゆえのこと、としている。<sup>2)</sup> 詩集は、散逸を防ぐ最も有効な手段である。しかし、詩会の詩集はその後ほとんど伝えられていない。蘭亭の会の後も、修禊の宴は引き続き行われた。例えば、宋の顔延之、齊の王融にはともに「三月三日曲水詩序」（『文選』卷四六下）がある。しかし、序こそ残っているものの、詩集は残されていない。印刷技術が進み、詩集の出版が日常的になった清朝の詩会隆盛期には、塩商らが主催する地方都市の詩会では、修禊のみならず、詩会の詩集が盛んに刊行されるようになった。<sup>3)</sup> しかし、その詩集もほとんど残されておらず、おそらくは雑誌感覚の扱いであったと思われる。まして修禊のような歳時の行事での詩集となると、文学性が期待されず、故に残される可能性はより低くなったのである。

清代の修禊でいえば、清初の王士禛（1634-1711）が揚州に赴任した折の紅橋修禊（康熙三年、1664）が名高い。王士禛の詩に唱和したものを集めて『紅橋唱和集』三巻が編まれたが、王士禛の原唱以外は散逸している。王士禛を継ぐ意志で開催された盧見曾（1690-1768）の紅橋修禊（乾隆二十二年、1757）は、「其時和脩禊韻者七千余人。編次得三百余巻。」（『揚州画舫録』巻十）と、並外れた規模の詩集が編まれたが、これも現存しない。これらの修禊詩集は、一時の賑わいを当時の社会に向けてアピールするため、後世に残そうという意志は、却って稀薄になっているように見える。こうしてみると『西湖修禊詩』が残されていることが、いかに特殊であるかがわかる。

## 2. 『西湖修禊詩』とは

『西湖修禊詩』は、乾隆十一年（1746）、杭州西湖で開催された修禊の詩会の詩をまとめたものである。西湖修禊は、『国朝杭郡詩統輯』巻六陳典注に以下のように記される。<sup>4)</sup>

按乾隆十一年丙寅閏三月三日、杭州太守鄂敏筠亭修禊事於湖上、会者凡六十一人。錢唐梁谿父文濂、周樸門京、金江声志章、金冬心農、厲樊榭鶚、丁菴泓敬、張柳漁湄、陳甸山兆崙、陳眉山兆峯、呂耜堂伊、吳鷗亭城、施竹田安、陸抑齋秩、吳藍田玉增、施北亭庭枢、周暢鶴宸望、丁誠叔健、吳奐若璠增、施大醇学濂、吳蘭林玉墀、厲繡周志黼、仁和許初觀大綸、孫晴湖陳典、胡質孚旻、汪復園台、梁菽林啓心、顧耕欄正謙、杭葦浦世駿、江敬齋源、王茨檐曾祥、顧寸田之鱗、張南漪燿、皇甫葉坡鯤、孫瑤圃庭蘭、杭果圃世瑞、趙勿葉一清、吳万洲中麟、歸安茅湘客宓奎、孫武水林、慈谿周雪崖羽遠、會稽魯秋塍曾煜、平湖陸恬浦培、張鉄珊雲錦、葉迎坡鑾、陸雲軒騰、海寧施蘭垞謙、許復齋承祖、鄞全謝山祖望、秀水錢籛石載、德清徐南墅以震、徐柳樊以泰、除根苑以坤。衲子則芟虛明中、讓山篆玉。其非浙產者、南陵劉迴舍琦、歙汪秀峰啓淑、宣城施槃齋念曾、滿州舒雲亭瞻、長沙周雪舫宣猷、閩林余齋緒光及筠亭太守也。太守彙刊其詩、而明中為之図、穆門為之序。

最初に「会する者凡そ六十一人」と参加者数を記す。一方修禊に参加した全祖望（1705-1755）の詩題には、「杭二葦浦以閏重三日為禊事之会于湖上、太守鄂鈍夫而下至者四十二人。蓋自劉仁本統行此舉于姚江、在元至正中今四百余年矣」（『鮚埼亭詩集』巻四）とあり、42人とする。42人というのは、王羲之の蘭亭の会と同じであり、また劉仁本の修禊の参加者と同じである。<sup>5)</sup>しかし現存の『西湖修禊詩』（武林掌故叢編所収）に収録されている詩人の数は85名である。これについては、『西湖修禊詩』所収の讓山の詩の自注に「聞諸公修禊湖上不克追赴、輒效其体奉簡（諸公湖上に修禊すと聞くも克く追赴せず、輒ち其の体に效いて簡を奉ず）」とあるように、修禊には参加せず、詩のみを書翰で送ったものを含むためである。

参加者の出身地を見ると、後半の僅か7人の詩人が「其非浙者」つまり浙江以外の詩人である他は、大半が浙江詩人それも錢唐、仁和という杭州の詩人である。これより先に開かれた王士禛の揚州紅橋での修禊では、山東出身の官僚王士禛の詩に唱和したのは、揚州以外の詩人が多く、後に同じく山東出身の盧見曾（1690-1768）が開いた紅橋修禊も、唱和者七千余名（『揚州画舫録』巻十）を得たが、これらは全国から揚州を訪ねたり詩を送ってきた詩人であり、開催地揚州の詩人ではない。これが杭州の修禊が揚州の修禊と大きく異なる点である。この時期の杭州は、各地方都市の詩壇で活躍していた杭州詩人達が次々に故郷に戻り、詩社を結び詩会活動を活発に行っていた。杭州の詩社隆盛の時期は、「吾郷詩社、自癸亥以後、称最盛者十年。（吾が郷の詩社、癸亥より以後、最盛と称すること十年。）」（『兩浙輜軒録』巻十九「梁啓心」）とあるように、癸亥つまり乾隆八年（1743）から十年間であったとされる。西湖で修禊が開かれた乾隆十一年は、まさにその隆盛期にあたる。

この年は閏三月があり、三月三日が二度あった。杭州でも修禊は二度開かれている。閏三月三日の修禊の作品をまとめたものが『西湖修禊詩』である。

## 2. 鄂敏「西湖修禊詩」序

### 2.1 鄂敏とは

西湖修禊を主催し、修禊の詩集を刊行したのは、当時杭州太守であった鄂敏 (?-1746) である。鄂敏が原名であるが、後に乾隆帝の命によって樂舜と改めた。字は鈍夫、筠亭と号し、満州鑲藍旗人である。雍正八年の進士で、庶吉士に改められ、編修を授けられた。乾隆九年から十一年まで杭州知府を務め、その間に西湖修禊を主催している。その数年後に再び浙江按察使、浙江巡撫として浙江に赴任している。鄂敏は、雍正朝で皇帝に信任され活躍した鄂爾泰 (1677-1745) の甥であり、鄂爾泰の親族の中でも、とりわけ優れた人材として注目されていた。<sup>6)</sup> しかし、乾隆二十一年 (1756)、浙江にいた時代に塩商からの不正な搾取と公金横領の罪で自尽を賜った。鄂爾泰の甥鶚昌 (1691-1760) も、その前年の乾隆二十年に、鄂爾泰の門下生胡中藻 (1695-175) が詩に叛逆の意有りと言われて死罪になると、彼と詩を唱和する仲間であったということで自尽を賜っている。いずれも鄂爾泰の死後に起きた事件であり、乾隆帝が鄂爾泰一族の力を奪おうとしたとも言われる事件である。罪人として断罪された鄂敏であるが、浙江の文人の中では、文学を愛し詩人を支援した鄂敏の評価は、生前も死後も変わることなく高かった。袁枚 (1716-1797) は、当時の詩会の主催者として、商人の他に官僚を挙げているが、その中に鄂敏の名も見える。

昇平日久、海内殷富、商人士大夫慕古人顧阿瑛、徐良夫之風、蓄積書史、広開壇坫。揚州有馬氏秋玉之玲瓏山館、天津有查氏心穀之水西莊、杭州有趙氏公千之小山堂、吳氏尺鳧之瓶花齋、名流宴咏、殆無虚日。…此外、公卿当事、則有唐公英之在九江、鄂公敏之在西湖、皆以宏獎為己任。不四十年、風流頓尽。(『隨園詩話』卷三-六〇)

昇平日久くして、海内殷富、商人士大夫 古人顧阿瑛、徐良夫の風を慕い、書史を蓄積し、広く壇坫を開く。揚州に馬氏秋玉の玲瓏山館有り、天津に查氏心穀の水西莊有り、杭州に趙氏公千の小山堂、吳氏尺鳧の瓶花齋有り、名流宴咏し、殆ど虚日無し。…此の外、公卿の事に当たるには、則ち唐公英の九江に在り、鄂公敏の西湖に在る有り、皆宏獎を以て己が任と為す。四十年ならずして、風流頓に尽く。

詩壇を主催した塩商を羅列した後、詩会を主催した官僚を挙げ、その中に鄂敏の名が見える。「宏獎」つまり人を引き立てることを自らの任務としたとあり、無位無官の詩人たちを支援した鄂敏の姿を伝えている。この後こうした風流を任務とする官僚がいなくなり、風流の伝統が絶えたと述べており、杭州での鄂敏に対する敬慕の念が見て取れる。

### 2.2 鄂敏と西湖修禊

鄂敏が西湖修禊を主催したことは、袁枚も大きな事件として記している。

同年舒瞻、字雲亭、作宰平湖、招吾郷詩人施竹田、厲樊榭諸君、流連倡和極一時之盛。同時杭郡太守鄂筠亭先生亦修禊西湖、名流畢集、各有歌行。…鄂公修禊序云「詩者先王之教也。山水清音、此邦為最。無与合之則調孤、有与倡之則和起。余安得拘俗吏之規規乎。此擬蘭亭之所由作也」。嗚呼、似此賢令尹賢太守何可再得。（『隨園詩話』卷七-八〇）

同年の舒瞻、字は雲亭、平湖に宰と作り、吾が郷の詩人施竹田、厲樊榭諸君を招き、流連倡和し一時の盛を極む。同時の杭郡太守鄂筠亭先生も亦た西湖に修禊し、名流畢集し、各おの歌行有り。…鄂公修禊序に云う「詩は先王の教えなり。山水清音、此の邦を最と為す。与に之と合う無ければ、則ち孤を調し、与に之に倡する有れば、則ち和して起つ。余安んぞ俗吏の規規に拘るを得んや。此れ蘭亭の由りて作る所に擬するなり」と。嗚呼、此のごとき賢令尹賢太守何ぞ再び得べけんや。

まず同時代に杭州詩人とともに唱酬に参加した官僚舒瞻と鄂敏によって杭州詩壇の隆盛がもたらされたことを記す。更に鄂敏の「西湖修禊詩」序の部分を用いし、このような賢明な太守は再び得られない、と述べており、杭州詩壇にとって、鄂敏が特別な官僚であったことがわかる。袁枚は鄂敏とその詩会を強く意識して自分も詩会を主催している。

近得鄂筠亭敏守杭州修禊西湖詩、首唱云、「修禊三春好、風花二月天。黃堂無底事、白髮有諸賢。筆濯西湖水、花搖鷺嶺烟。風光徼往時、不減永和年。」一時作者如雲。四十年來、風流歇絶。今年、余在湖樓招女弟子七人作詩會。…一時紳士伝韻事、以為昔日筠亭太守所未有也。（『隨園詩話補遺』卷五-四四）

近ごろ鄂筠亭敏の杭州に守たりて西湖に修禊するの詩を得たり、首唱に云う、「修禊三春好し、風花二月の天。黃堂に底事も無く、白髮に諸賢有り。筆を西湖の水に濯い、花は鷺嶺の烟に揺れる。風光往時に徼し、永和の年を減ぜず。」一時作者雲のごとし。四十年來、風流歇絶す。今年、余湖樓に在り女弟子七人を招きて詩会を作す。…一時の紳士韻事を伝え、以為えらく昔日筠亭太守の未だ有らざる所なりと。

ここには鄂敏の西湖修禊詩で首唱として詠じた詩が紹介され、それに対して多くの詩人が唱和詩を作ったことが記されている。袁枚が女弟子の詩会を開いた時に、鄂敏もなしえなかったこと、と鄂敏を意識していることから、鄂敏の修禊は詩会として名高いものであったことがわかる。ただ、ここに挙げられた鄂敏の詩は『西湖修禊詩』所収の詩とは全く異なる。これは鄂敏が数年に渡り複数回修禊を主催したことを意味すると考えられる。

## 2.3 鄂敏序の内容

蘭亭会の詩集には、王羲之の序と、孫綽（314-371）の後序がある。『西湖修禊詩』もこれに倣い、鄂敏の序と、周京の後序がある。

まず鄂敏の序を見てみよう。<sup>7)</sup>

内容に即して幾つかの部分に分けて読むこととする。

[1] 詩者先王之教也。古意存斯、雅音播矣。古人韻事、沾丐後來。可效者、意焉而已。意合而音以諧、音諧而詩以著、詩著而教以伝。発響幽岩、洗心川上、鼓舞風騷、步趨前軌、其裨益豈小小哉。蘭亭禊飲也、即詩教也。持衰盛、泯彭殤、疏襟遠趣、各見一斑。顧其所得者、沂水春風之意。故其所陳者、写心雪性之音。後人莫參其意、誰矢其音。詩歌絶響、教且淪荒、何述古之難与。

詩は先王の教えなり。古意斯に存し、雅音播く。古人の韻事、後來に沾丐す。效うべき者は、意のみ。意合いて音以て諧い、音諧いて詩以て著し、詩著して教え以て伝わる。響きを幽岩に発し、心を川上に洗い、風騷を鼓舞し、前軌を歩趨すれば、其の裨益豈に小小たらんや。蘭亭禊飲は、即ち詩の教なり。衰盛を持し、彭殤に泯び、疏襟遠趣、各おの一斑を見わす。顧だ其の得る所の者は、沂水春風の意なり。故より其の陳ぶる所の者は、写心雪性の音なり。後人其の意に參する莫ければ、誰か其の音をつらねん。詩歌響きを絶てば、教え且に淪荒せんとす、何ぞ古を述ぶるの難きや。

おおまかな通釈は以下の通りである。

詩は先王の教えである。古い趣はここにあり、雅な音は広く伝わる。古人の詩歌の遊びは後世の者に恵み与えるものが多い。ならうべきは、その心意のみである。心を同じくして音がそれに調和し、音が調和して詩が作られ、詩が作られて詩教は伝わるのである。詩の声をひそかな岩に響かせ、心を川のほとりに洗い、詩の風雅を鼓舞し、先人の手本に続けば、その益することどうして微々たるものであろうか。いや、大きな役割を果たすのだ。蘭亭の修禊は、これぞ詩教である。人生には浮き沈みがあり、長短の異なる寿命は尽きるが、心に有る高遠な志趣は、それぞれ的一端を（この詩宴に）見ることができる。そこで得られるのは、『論語』にいう、沂水のほとりで仲間と風に吹かれて詩を詠じるという楽しみだけである。そこで詠ずる言葉は、雪のように、時に随ってその姿を変える自在でのびやかな心の響きである。後世にその意に同意して仲間となるものがいなければ、その詩を連ねる詩人たちもいないだろう。詩歌が絶えてしまえば、詩教も廃れゆくであろう。古を述べることはなんと難しいことか。

最初に出て来た「詩者先王之教也」とは、『礼記』経解にある以下の内容を指す。

孔子曰、入其国、其教可知也。其為人也、溫柔敦厚、詩教也。…故詩之失愚、…其為人也、溫柔敦厚而不愚。則深於詩者也。（『礼記』卷二十六経解）

孔子曰く、其の国に入るや、其の教え知るべきなり。其の人と為りや、溫柔敦厚なるは、詩の教えなり。…故に詩の失は愚、…其の人と為りや、溫柔敦厚にして愚ならざるは、則ち詩に深き者なり。

これは、「詩」を始めとする五経の教化について述べた中の、詩について述べた部分である。その国に入り風俗を見れば治者の教化がわかる、というのは、治者の教育の責任を問うものでもある。『礼記』では、詩の教化は、溫柔敦厚、つまり人を温和で人情に厚くすることだという。鄂敏は詩によって、杭州の地を教化し、人を溫柔敦厚とすべきことを自分の役割として、西湖修禊を主催したと言うのである。

「詩教」の語は、鄂敏に限らず、清初になって盛んに用いられるようになった語でもある。詩論において論じられることが多いのだが、<sup>8)</sup> 実は、清初から清代中期にかけて編纂された様々な詩集の序には、「詩教」の語が多数見える。文字統制の厳しかった時代に、「詩教」は詩集の正統性を示す語として用いられていたのであろう。「韻事」は詩歌の風雅な遊びであり、ここでは詩宴を指す。気の合った詩人たちが詩を詠み交わし、詩集に書き表すことで広く伝えることができるという。つまり詩教の実践としての詩宴を後世の人に伝えんがために、『西湖修禊詩』を編纂するというのである。王羲之の蘭亭修禊は、人々が集って詩を詠ずるという行為を今日に伝え、詩の教化の役割を果たしたということであろう。

「蘭亭禊飲」以下、更に蘭亭修禊について述べる。王羲之の蘭亭序は、その後半で限りある人生への感慨を述べており、鄂敏も蘭亭序への共感を記す。「持衰盛、泯彭殤」は、「衰盛」は人生の浮き沈み、彭殤は、彭が八百歳の齢を保ったとされる彭祖、殤は幼いまま死んだ子のことであり、そのまま長寿と夭逝を指す。元は『莊子』齊物論に「莫寿於殤子、而彭祖為夭。(殤子より寿なるは莫く、彭祖を夭と為す)」とあり、無なる本体から見れば、長寿も夭折も同じだとする考えを述べるものである。「蘭亭序」では、この語を用いて「固知一死生為虚誕、齊彭殤為妄作。(固より死生を一にするは虚誕為り、彭殤を齊しくするは妄作たり。)」と、逆に莊子の説をでたらめなものとし、儂い生命であればこそ、それを惜しむのが人生であるという。蘭亭序にはまた「況修短随化、終期於尽。(況んや修短化に随い、終に尽くるに期するをや。)」とあり、生命の長い者も短い者も皆変化のままに随い、最後には命尽きるに決まっている、とその儂さを言うが、鄂敏序もほぼ同じ内容を述べる。

「沂水春風」は、『論語』先進篇にみえる曾点の言葉を指す。世間から認められたら何をしたいのか、と孔子が弟子たちに尋ねたところ、曾点が答えたのが次の言葉である。

(曾点) 曰、莫春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而归。夫子喟然歎曰、吾与点也。

(曾点) 曰く、莫春には、春服既に成る。冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて帰らん、と。夫子喟然として歎じて曰く、吾点に与せんと

曾皙は、晩春に、春服に着替え、元服したばかりの若者5、6人と、童子6、7人を連れて沂水の温泉で湯浴みをし、舞雩の雨乞い台で風に涼み、歌でも詠じながら帰りたいと言った。孔子はこの言葉に共感する。『論語』では、莫(暮)春とのみいい、三月三日とはっきり記していないものの、古くから修禊と結びつけてとらえられてきた。<sup>9)</sup>

「写心雪性」については、「写心」は、向秀の「思旧賦」(『文選』卷十六)に「遂援翰而写心(遂に翰を援りて心を写す。)」とある。これは向秀が、嵇康呂安といった友人たちとの遊宴の思い出を懐かしんで作った賦の最後の部分であり、李善注に「毛詩曰、我心写兮。」とある。『毛詩』小雅「蓼蕭」には、「既見君子、我心写兮。(既に君子を見れば、我が心写す。)」とあり、鄭箋に「其の情意を舒べ、留恨する者無きなり」、集伝に「其の心を翰写するなり」とあり、「写」は心のうちを述べて憂いを晴らすことをいう。「雪性」は『孟子』告子に「孟子以為羽性輕、雪性消、玉性堅。(孟子以為えらく、羽性は軽く、雪性は消え、玉性は堅し。)」とあり、雪の性質は消えることにあるとする。謝惠連「雪賦」(『文選』卷十三)乱には、これを踏まえ、「未若茲雪、因時興滅。(未だ茲の雪の時に因って興滅するにしかず)」と、雪が時に従って姿を変えて消えてしまうのに、白羽、白玉は及ばないとする。また「素因遇立、汚随染成。縦心皓然、何慮何營。(素は遇うに因りて立ち、汚は染むるに随って成る。心を皓然に縦にし、何をか慮り何をか營まんや。)」といい、雪の白さは、情況に逆らって無理するのでなく、周囲のままに姿を変え自在であるとする。こういったのびやかな心を歌うのが修禊の詩であるというのであろう。

鄂敏序の前半は、經書を踏まえ、六朝の典故によりつつ、修禊の詩が宴会の詩というに留まらず、「詩教」という儒教の教えを体現するものであり、名教に則るものであることを強調する。そしてそれを体現したのが王羲之による蘭亭会であり、後世に同調するものがなければならないという。それが西湖修禊なのである。

以下、鄂敏舒の後半である。

[2] 余守土於杭、期月有余。愧無古人之詩、可彰先王之教。而特以山水清音、此邦為最。又況兩浙東西士夫彙萃於茲者、指不勝屈。無与合之、則調孤、有与倡之、則和起。余安得拘俗吏之規規乎、此擬蘭亭之所由作也。重逢上巳、適值閏余。不泥古而自堪復古、湖頭風雨実足詠懷。四言五言、体仍其旧、而分韻抽毫、引商刻羽、各追夫意之所欣、以振其音之所協。落紙無陳言、浮觴無算爵。詩情方懋、風教油然、安知蘭亭之為蘭亭、而擬蘭亭之非蘭亭邪。嗚呼、振起斯文、移風易俗、守土者之責也。余有志焉而未逮、今幸群賢雲集、詩酒移情、不減永和盛事。儻由是而之焉、共熏烝而淫液焉、伝播四方、謳歌金石。今日之事、豈徒教起茲邦、希蹤先哲云爾哉。滿州鄂敏筠亭序。

余 土を杭に守り、期月に余有り。古人の詩の、先王の教を彰らかにすべき無きを愧ず。而して特に山水清音を以て、此の邦を最と為す。又況んや兩浙東西の士夫の茲に彙萃する者、指屈するに勝えざるをや。与に之と合う無ければ、則ち孤を調し、与に之に倡する有れば、則ち和して起つ。余安んぞ俗吏の規規に拘るを得んや、此れ蘭亭の由りて作る所に擬するなり。重ねて上巳に逢い、適たま閏余に値たる。古に泥まらずして自ら復古に堪え、湖頭の風雨実詠懷に足る。四言五言、体は其の旧に仍りて、韻を分けて毫を抜き、商を引き羽を刻し、各おの夫の意の欣ぶ所を追い、以て其の音の協う所を振るう。紙に落とせば陳言無く、觴を浮かべては算爵無し。詩情方に懋め、風教油然、安んぞ蘭亭の蘭亭為るを知りて、蘭亭の蘭亭に非ざるを擬せんや。嗚呼、

斯文を振起し、風を移し俗を易うるは、土を守る者の責なり。余に志有りて未だ逮ばざるに、今幸いに群賢雲集し、詩酒もて移情し、永和の盛事を減ぜず。儻し是に由りて之<sup>い</sup>げば、共に熏蒸して淫液し、四方に伝播し、金石に謳歌せん。今日の事、豈に徒に教えの茲の邦に起き、先哲に蹤<sup>したが</sup>わんことを希うとしか云うのみならんや。満州鄂敏筠亭序す。

私（鄂敏）は杭州の太守となり、一年余となる。恥ずべきは、先王の教えを明らかにするような古人の詩が私には無いことである。そして、特に山水の清らかな響は、この地が』最高だ。ましてやここに集う浙西浙東の士大夫は数え切れないほど多いのだ。彼らと心が合うところが無ければ、孤独をもてあそぶこととなり、彼らと詩を歌い始めれば、うちとけてゆくことができる。私はどうして俗吏の見識の狭さにとらわれることなどしていられようか。これぞ蘭亭の会が行われた目的にならうところである。閏三月で二度目の上巳を迎え、おりよく今年は三月がひと月余分にある。古にとらわれることなくしてこそ自ら復古となりうるし、湖のほとりの風雨は思いを詠ずるのに十分である。四言詩、五言詩という、形式は蘭亭の会の時そのまま、韻を分けて筆を振るい、商、羽の高尚な音を響かせ、各々が心の喜ぶところを追って、調和する音をそれに合わせる。筆を落とせば陳腐な言葉は無く、盃を水に浮かべては何杯と決めずに酔うまで酒を飲む。詩情はまさに高まり、風俗の教化は盛んになるとなれば、蘭亭修禊の蘭亭たる意義を知ることとなり、蘭亭修禊の蘭亭本来の意義でないものについては真似をしない。ああ、文学を盛んにし、風俗を感化によって変えるのは、地方太守の責任である。私にはその意志があるが未だ実践に及んでいなかったのだが、今幸いなことに賢人達が雲集し、詩と酒で心情を変えて、永和九年の蘭亭の盛事に劣ることがない。もしこれに従ってゆけば、詩人たちは共に心を動かし、詩を詠ずる声を長く伸ばし、詩は四方に伝わって広まり、楽器に合わせて謳歌するであろう。今日の事は、ただ詩教がこの地で起こり、先哲にならったというだけであろうか。いやそれだけではあるまい。

以上が鄂敏序の後半である。「期月」は、ここでは1年を指す。鄂敏が杭州に赴任したのが乾隆九年であり、西湖修禊が乾隆十一年である。「引商刻羽」は、宋玉「対楚王問」（『文選』巻四十五）に見え、商と羽は中国古来の音階で、商は最も高く強く響く音、羽は最も澄んだ音で、高尚な音楽の喩えに用いられる。「対楚王問」では、俗な音楽に唱和する人は多いが、高尚な音楽に唱和する人は少ない、という。鄂敏序は、これを踏まえて、西湖修禊が高尚で凡人のなしえないことであると言うのである。「四言五言」とは、蘭亭の会の詩が、四言詩と五言詩であったことを踏まえ、この修禊でも四言詩、五言詩各一首を課したことをいう。修禊の宴に集った人々を「群賢」と称するのも、王羲之「蘭亭序」と同じである。こうして西湖修禊は、王羲之の蘭亭会に倣うという姿勢を貫くのであるが、倣うべきは形でなく意であるとする。その意が詩教つまり文学で地方を教化することであるという。鄂敏はあくまでも杭州太守という官僚の立場に立ってこの詩会の意義を説く。歴史的には文学の遊びを主とするとされる修禊を、鄂敏はあえて地方の教化のための行事と位置

づけるのである。また修禊が四方に伝わることで、この地に教化が始まり他方に広まるといふ。修禊を教化とし、地方官僚の役割を強調しているのが鄂敏序の特徴である。

### 3. 周京西湖修禊詩後序

#### 3.1 周京とは

周京（1677-1749）は、字を西穆、一の字を少穆といい、また辛老という。穆門と号し、晩年は東双橋居士と号した。杭州銭塘の人である。雍正年間に諸生となり、乾隆元年に六十歳で博学鴻試に推挙されるも応じず、後に州同知を考授せられた。各地を遊歴し、晩年は故郷杭州で詩社の同人たちと唱酬を繰り返す。乾隆十四年、七十三歳で世を去った。『無悔齋集』十五巻がある。全祖望は、「杭之詩人為社集、群雅所萃、奉穆門為職志。（杭の詩人 社集を為し、群雅の萃まる所、穆門を奉じて職志と為す。）」（『鮎埼亭集』内篇巻十九「周穆門先生墓志銘」と、詩社の中核をなした人物であるとする。同郷の後輩である厲鶚の「無悔齋集序」には、若い頃の詩会の記憶として「乙未、丙申間、予輩数人為文字之会、暇即相与賦詩為樂。酒闌灯灺、逸韻横飛、必推周兄穆門為首唱。（乙未、丙申の間、予が輩数人 文字の会を為り、暇あれば即ち相与に詩を賦して楽しみと為す。酒闌に灯灺えんとし、逸韻横飛するに、必ず周兄穆門を推して首唱と為す。）と記しており、若い頃から詩会の領袖として人気を集めていたことが分かる。長く故郷を離れていたが、乾隆九年（1744）に杭州に帰り、杭州詩会に参加して詩会隆盛の立役者とされた。

#### 3.2 周京後序の内容

周京後序を、以下幾つかに分けて読んでゆく。

[1]『周礼』春官、「女巫掌歳時祓除鬻浴。其修禊用上巳」。『風俗通』謂、「禊、潔也、水上盥潔之也。巳、社也。邪疾去祈介社也」。『漢礼儀志』、「三月三日、官民並禊飲於東流水上」。魏以後、只用三月三日。

『周礼』春官に、「女巫 歳時の祓除鬻浴を掌る。其れ修禊に上巳を用う」と。『風俗通』に謂う、「禊は、潔むるなり、水の 上にて之を盥潔むるなり。巳は、社なり。邪疾去り介いなる 社を祈るなり」と。『漢礼儀志』、「三月三日、官民並びに東流水上に禊飲す」と。魏以後、只だ三月三日を用う。

『周礼』春官には「巫女は歳時のお祓い、沐浴を掌る。修禊には上巳の日を用いる」とある。『風俗通』には「禊とは潔めることである。水辺で洗い清めることをいう。巳とは社である。悪い病が去り、大きな幸いがくることを祈るのである」とある。『漢書礼儀志』には、「三月三日には、官民ともに東流する川のほとりで禊をし酒を飲む。」とある。魏以後は、三月三日だけを修禊に用いることとなった。

ここでは、まず修禊の行事の由来について述べる。『周礼』春官の本文は「女巫掌歳時祓除鬻浴。」であり、修禊にも上巳にも触れていない。「修禊用上巳」は、鄭玄注に「歳時祓

除如今三月上巳如水上之類（歳時の祓除は今の三月上巳に水上に如くの類の如し）」とあるのを引いている。『風俗通』以下は、『風俗通義』巻八に「禊謹按、周礼、男巫掌望祀望衍、旁招以茅。女巫掌歳時以祓除鬻浴。禊者、潔也。…故於水上鬻潔之也。巳者祉也。邪疾已去、折介祉也。（禊は謹んで按ずるに、周礼に、男巫望祀望衍を掌り、旁に招くに茅を以てす。女巫歳時を掌るに祓除鬻浴を以てす。禊は、潔むるなり。…故に水の上に於いて之を鬻潔すなり。巳は祉なり。邪疾已に去り、介いなる祉を祈るなり。）」とあり、もともと禊について論じたものの中に周礼を引用し、解説を加えている。上巳の日の説明をし、巳の意味をさいわい、と解く。『漢礼儀志』以下は、『続漢書礼儀志』を指す。『続漢書礼儀志』は、『後漢書』に取り入れられているため、『後漢書』礼儀志をみると、「明帝永平二年三月…是月上巳、官民皆繫於東流水上（明帝永平二年三月…是の月上巳、官民皆東流水上に繫む。）」とある。繫は潔と同じ。ここでも上巳とだけ述べ、三日とは言っていない。ただ、「官民」と、官僚と人民がそろって川辺で修禊を行うことを記していることは注目すべき点といえる。官僚主体の修禊詩宴の濫觴を示すものであろう。西湖修禊はその伝統に則っている。魏以後は三月三日を用いる、というのは、『宋書』卷十五礼二に三月上巳の風俗として、水辺で禊をすることを挙げ、「自魏以後但用三日、不以巳也。（魏より以後但だ三日を用い、巳を以てせざるなり。）」と記す。」とあるのによる。

このように後序が、修禊が古代から伝えられ発展した伝統の上に立つ権威ある行事であることを典故を引いて述べるのは、西湖修禊がその歴史の上に立つ権威あるものであることを言わんがためである。ここまでは修禊の行事と文学との関わりには触れられていない。以下に、文学と修禊との関わりの歴史について述べる。

[2] 俗尚既古、篇章特繁。禊堂文讌、見於張衡、蔡邕、王融、沈約之文。独晋右軍王羲之之蘭亭会、一觴一詠、流為美譚。迨元至正參軍劉仁本仿蘭亭之会、於秘園湖会者亦四十二人、各補未成詩二十四篇、頗伝人間。

俗尚既に古く、篇章特に繁し。禊堂の文讌は、張衡、蔡邕、王融、沈約の文に見ゆ。独り晋の右軍王羲之の蘭亭会のみ、一觴一詠し、流れて美譚と為る。元の至正に迨び參軍劉仁本 蘭亭の会に倣い、秘園湖に於いて会する者亦た四十二人、各おの未だ成らざるの詩二十四篇を補い、頗る人間に伝わる。

流行するようになった修禊は古くからあるもので、これに関わる詩文は特に多い。禊堂の文宴は、張衡、蔡邕、王融、沈約らの文に見える。ただ晋の右軍であった王羲之の蘭亭会だけが、酒杯を交わしつつ詩を詠み、美談として伝わった。元の至正年間になり、時の參軍であった劉仁本が、王羲之の蘭亭の会にならって秘園湖で修禊を行い、集まったものもこれも42人、各詩人が詩会で作りきれなかった詩24篇を補い、広く世間に伝えられた。

ここでは修禊と修禊の詩宴の歴史を溯って述べている。「俗尚」は、世俗の好みをいい、ここでは修禊の流行をいう。「禊堂文讌」として挙げられた「張衡、蔡邕、王融、沈約の文」とは、以下の作品を言う。

張衡（78-139）は、後漢の人。字は平子。修禊に関する作品とは、『文選』卷四賦乙「南都賦」である。その中に「於是暮春之禊、元巳之辰、方軌齊軫、祓于陽瀕。（是に於いて暮春の禊、元巳の辰、軌を方べ軫を齊しくして、陽瀕に祓ふ。）」と三月上巳に人々が集う様子を記している。しかし、詩宴の様子は見えない。

蔡邕（132?-192）は後漢の人。字は伯喈。修禊に関する作品とは、『宋書』卷十五礼志二に見える「蔡邕章句曰、『陽气和暖、鮪魚時至、將取以薦寢廟、故因是乘舟禊於名川也。論語、暮春浴乎沂。自上及下、古有此礼。今三月上巳、祓於水滨、蓋出此也。』（蔡邕章句に曰く、『陽气和暖にして、鮪魚時に至り、將に取りて以て寢廟に薦めんとし、故に是に因りて舟に乗りて名河に禊うなり。論語に、暮春沂に浴す。上より下に及ぶまで、古より此の礼有り。今三月上巳、水滨に祓するは、蓋し此に出づるならん。』と。）」を指す。「蔡邕章句」は、蔡邕の「月令章句」であり、引用中のみ見ることができる。ここでは陽気が暖かくなると、チョウザメが来て、それを王に献上するために舟に載って河で禊の行事を行うという。また身分の上から下まで、古よりこの行事があることをいう。そして『論語』の「暮春浴乎沂」つまり鄂敏序にも見えた、先進篇の「暮春には、春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風じ、詠じて帰らん」を取りあげる。論語では修禊とは記していないが、蔡邕は、『論語』の記述を上巳の禊の起源ととらえている。文謙の様子が直接描かれるわけではないが、論語は最後に「詠じて帰らん」と、詩を詠じることを記している。

王融（467-493）は、南北朝、南齊の人。字は元長。修禊に関する作品としては、「三月三日曲水詩序」（『文選』卷四十六序下）がある。李善注に「蕭子頤齊書曰、武帝永明九年三月三日、幸芳林園、禊飲朝臣、勅王融為序、文藻富麗、当代稱之。（蕭子頤齊書に曰く、武帝永明九年三月三日、芳林園に幸し、朝臣に禊飲せしめ、王融に勅して序を為らしむ。文藻富麗にして、当代之を稱す、と。）」とあり、齊の武帝の永明九年（491）に、皇帝の招集で修禊の宴が開かれ、王融に詩序を作らせたのである。序の最後には、「有詔曰、今日嘉会、咸可賦詩。凡四十有五人、其辞云爾。（詔有りて曰く、今日の嘉会、咸詩を賦すべし、と。凡そ四十有五人、其の辞に爾云ふ。）」と言い、集まった四十五名がそれぞれ詩を賦し、それをまとめて詩集としたものにつけた序であることがわかる。これはまさに修禊詩宴と詩集編纂の事実を示す例である。

沈約（441-513）は、南北朝、梁の人。字は休文。「三月三日率爾成篇（三月三日、率爾として篇を成す）」（『文選』卷三十雜詩下）という五言古詩がある。この詩自体が、上巳に詩を賦したことの証左であるが、更に詩句には、「麗日属元巳、年芳具在斯。洛陽繁華子、長安輕薄兒。東出千金堰、西臨鴈鶩陂。…象筵鳴宝瑟、金瓶汎羽卮。（麗日は元巳に属し、年芳は具さに斯に在り。洛陽の繁華の子、長安の輕薄の兒。東のかた千金堰に出で、西のかた鴈鶩陂に臨む。…象筵に宝瑟を鳴らし、金瓶に羽卮を汎ぶ。）」とあり、三月三日に若者達が郊外の水辺に繰り出して宴会をすることを述べている。この中には、すでに禊の儀式に関わる記述は見えず、酒宴の中で詩を詠じる行事となっていたことがわかる。

これらは修禊を題材とした作品といえるが、いずれも広く知られた作品とは言えない、という。修禊が「一觴一詠」の詩酒の宴として、伝えられて美談となったのは、やはり蘭亭詩集が伝えられたからである。先の王融の「三月三日曲水序」は、序があるからには詩集があったはずなのだが、今は序を残すのみである。修禊はこのように数多く開かれ、断片的に記録がのこっているものの、修禊詩集の最も古く完全な例は、浙江の会稽で開かれた王羲之による蘭亭の会のみなのである。

さて、次に挙げられるのは、これらの作品から大きく時を隔てた、元末明初の劉仁本（?-1368）による修禊である。劉仁本は、字を徳元といい、羽庭と号し、浙江黄岩の人である。元末の進士で至正十九年（1359）、江浙省左右司郎を授けられる。名士趙俶、謝理、朱右らと詩を賦して、名をあげた詩人でもある。元末に反乱を起こした浙江の方国珍の幕府に入って活躍し、明王朝になってから処刑された。元末の混乱の中で至正庚子二十年（1360）、参軍であった劉仁本が会稽の余姚において「続蘭亭会」を催したことは、浙江の歴史に残る事件であった。王士禛の『静志居詩話』に、劉仁本の自序を引く。

左司統蘭亭会補参軍劉密詩云、…。自序云、庚子春、仁本治師会稽之余姚、乃相竜泉之左麓、州署之後山、得神禹祕囟之処、水出巖罅、瀦為方沼、疏為流泉、卉木叢茂、行列紫薇、間以竹篁、彷彿乎蘭亭景状、因作零詠亭以表之。合甌、越來会之士、得四十二人、同修禊事、取晋人蘭亭会囟。詩欠不足者、各占其次、補四、五言各一首。因曰続蘭亭会云。（『静志居詩話』卷二十四「劉仁本」）

左司の続蘭亭会補参軍劉密詩に云う…。自序に云う、「庚子春、仁本 会稽の余姚に治師し、乃ち竜泉の左麓、州署の後山を相るに、神禹祕囟の処を得。水は巖罅より出で、瀦めて方沼と為し、疏して流泉と為し、卉木叢茂し、紫薇を行列し、間に竹篁を以てし、蘭亭の景状を彷彿し、因りて零詠亭を作りて以て之を表す。甌、越より会に来たるの士を合わせて、四十二人を得、修禊の事を同にし、晋人蘭亭会囟を取る。詩欠けて足らざる者は、各おの其の次を占め、四、五言各一首を補う。因りて曰く続蘭亭会としか云うのみ、と。

劉仁本の修禊は、蘭亭に似た場所を会稽に見つけたことから始まった。そこに集められたのは、甌越つまり浙江の人 42 人である。これは王羲之の蘭亭会の人数と同じであり、故に「続蘭亭会」と名付けたのである。ただ、劉仁本の修禊は、「頗伝人間」というものの、序文のみ伝わっているが、詩人と詩の記録は散逸しており、ここにも修禊の記録が残りにくいことが見て取れる。<sup>10)</sup>

ここまでで周京が言うのは、修禊は文学作品の中に古くから描かれているが、有名な作品はほとんどないこと。その中で、文学史上初めて修禊詩宴の記録を残し、今日に伝えられる蘭亭会も、元末の劉仁本の歴史的な修禊の詩会も、いずれも浙江の地で開かれたということである。つまり浙江が修禊の詩宴という文化的な歴史を担う中心の地であり、同じ

浙江杭州で開かれた「西湖修禊」も、その華々しい歴史の上にあるという矜持の元に、詩集を編むというのである。

[3] 方今朝野恬熙、庶物蕃廡。江郷好春、明湖映郭。間居則幽意独耽、盍簪則逸興具举。三春有閏、芳華正長。因統永和旧会於湖之浜、撫嘉樹、臨清流、顧瞻興懷、賦詩相答、遥遥歷千有五百余載之風流如昨日矣。嗟乎、江左晏安、裙履是与、誰謂觴詠之不足於用哉。況吾儕生当盛明、人逢間世。流連日夕、足永千齡。正不必念俯仰之頓殊勞今昔之致感也。因次述作、記爵里凡若干人、若干詩著於卷。乾隆十一年閏三月三日錢塘穆門周京序。

方今朝野恬熙にして、庶物蕃廡す。江郷春に好く、明湖郭に映ず。間居すれば則ち幽意独り耽り、盍簪すれば則ち逸興具に挙ぐ。三春に閏有り、芳華正に長し。因りて永和の旧会に湖の浜に続き、嘉樹を撫し、清流に臨み、顧瞻して懷を興し、詩を賦して相答え、遥遥として千有五百余載の風流を歴ること昨日のごとし。嗟乎、江左晏安として、裙履是れ与かれば、誰か觴詠の用うるに足らずと謂わんや。況んや吾が儕生は盛明に当たり、人は間世に逢うをや。日夕に流連すれば、千齡を永くするに足る。正に必ずしも俯仰の頓に殊なるを念じ、今昔の感を致すを勞えざるなり。次に因りて述作し、爵里を記すこと凡そ若干人、若干の詩を卷に著わす。乾隆十一年閏三月三日錢塘穆門周京序す。

今や朝廷民間とも平安に治まっており、万物は盛んに茂っている。江南の郷は春が美しく、明るく澄んだ湖は城外の町に映える。閑居しては静かな物思いに一人耽り、友人同士が集まれば世俗を離れた興味がすべて集まる。この春は閏三月があり、かぐわしい花々が伸び盛りだ。そこで永和年間の蘭亭の会を継ぐ詩会を西湖のほとりで開き、美しい花の咲く木を愛撫し、清らかな流れに臨み、振り返って感慨をもよおし、それを詩に詠じて互いに応じれば、はるか1500年余を経て蘭亭の会がまるで昨日のここのようである。ああ、江左の地は安泰で穏やかであり、良家の若者たちがこの詩宴に参加すれば、酒を飲み詩歌を詠ずることが何の役にも立たないなどと誰が言えようか。まして我が仲間が盛明の世に生き、のどかな時代を過ごすことができている。朝な夕な詩歌の遊びにふければ、それで寿命も延びる。さすればまさに人生の突然の有為転変を思い、今昔の悲哀の情に感じ嘆くこともあるまい。詩作を順序にしたがって記し、身分出身地を記すこと若干名、若干の詩を詩集に載せる。

まず、現在が治世で榮えていること、その中で江南の地が美しい春を迎えていることを述べ、その穏やかな環境の中で修禊が開催されることを述べる。又参加する詩人達はその世の中に満足し、ゆえに詩歌に耽ることができるのだと言い、満ち足りた時代の平和な詩宴が人々をますます幸福にすることを語る。

鄂敏序では、杭州の地を教化する任務のあることを述べていたが、周京の序では、杭州詩人の立場から、この地の詩人が、いかに平和と繁榮を享受して穏やかに風雅を楽しんで

いるかを強調する。蘭亭会と異なるのは、王羲之は人生のはかなさを嘆じていたのに対し、周京は西湖修禊の唱和の中では、人生の悲哀を感じ嘆くこともない、それほどに幸福で満ち足りた思いを共有するのがこの西湖修禊だとする点である。

周京後序は、浙江という地が修禊の文学の中心地としての伝統を担っていること、またこの地の平穏と人材の温和、そこに生まれる文学の穏やかであることを強調する。その象徴として西湖修禊を位置づけるのである。

最後に詩とともに詩人の身分、出身地を記すというのは、当地の人材を記録するためである。単なる詩宴ではなく、浙江の文学史料の一端となるべく、詩集を編修すると言う意図がここには見える。

## まとめ

以上、鄂敏序、周京後序から、『西湖修禊詩』という作品を見てきた。鄂敏は地方太守としての責務の上から、教化としての西湖修禊を開くことを語り、周京は杭州詩人として、浙江という、文学の伝統ある土地に開かれる西湖修禊の意義を語っている。両者の立場は異なるが、いずれにも共通するのは、杭州を含む浙江の地に対する意識である。

鄂敏が教化によってこの地を平和にする、ということは却ってこの地が教化を必要としていることを示しており、一方周京がことさら浙江の地の平和を言うのも、また詩宴を語るのには不自然でもある。その背景には清朝政府の浙江に対する危機意識と、それに対する浙江の抵抗があった。そもそも浙江は知識人によるレジスタンスの伝統がある。清初は文字獄で思想統制を行ったが、その際最も危険視されたのは浙江である。その一つとして、文字獄にからんで浙江の科挙が停止された事件がある。雍正四年、査慎行の弟査嗣庭が郷試で出題した問題文の記述と、汪景祺の文稿中の年号の記述に清朝を呪詛する内容があるとして、両者は投獄された。浙江の風気に危険を感じていた雍正帝は、この事件を契機に浙江への不信感を一気に強め、浙江の郷試会試を停止したのである。

雍正四年、以浙人査嗣庭、汪景祺著書悖逆、既按治、因停浙江郷会試。未幾、以李衛等請、弛其禁。（『清史稿』卷一百八 選舉志三）

雍正四年、浙人査嗣庭、汪景祺<sup>はいぎやく</sup>著書悖逆し、既に按治するも、因りて浙江郷会試を停む。未だ幾ばくならずして、李衛等の請を以て、其の禁<sup>ゆる</sup>を弛ましむ。

この『清史稿』の記事については、蕭爽『永憲録』巻四には「浙江風俗惡薄如此。（浙江の風俗惡薄たること此のごとし）」と、個人的な問題ではなく、「浙江の風俗」という地域性に問題があるとされたことが記されている。科挙で常に多数の合格者を出してきた浙江にとって、この事件は衝撃的であった。乾隆年間になっても朝廷の危険視は変わることがなかった。『四庫全書』編纂に際して、乾隆帝は以下のように述べている。

伝聞異詞必有詆觸本朝之語。正当及此一番查弁、尽行銷燬。杜遏邪言、以正人心而厚風俗。断不宜置之不弁。此等筆墨妄議之事。大率江浙兩省居多。

(『清実録』卷九百六十四 乾隆三十九年八月)

伝聞異詞に必ず本朝を詆觸するの語有り。正に当に此の一番の查弁に及び、尽く銷燬を行うべし。邪言を杜<sup>とあつ</sup>遏して以て人心を正して風俗を厚くす。断じて宜しく之を置きて弁ぜざるべからず。此等筆墨妄議の事、大率江浙兩省多きに居る。

つまり清朝を批判する語は江蘇浙江に多いため、書籍を処分してこそ人心を正し風俗を厚くすることになるというのである。雍正から乾隆年間にかけて、浙江には常にこうした政府の厳しい眼差しが注がれていたのである。浙江には蔵書家が多く、危険な書物を蔵し、また読んでいる可能性が高かった。しかも蔵書家は盛んに詩会を主催した。その中でも危険な知識人と見なされた浙江文人が集会するとなれば、西湖修禊は、朝廷から警戒されてもおかしくない。故に鄂敏はあえて浙江の風俗を教化すべく修禊を開くことを述べ、地元の詩人たる周京は、その地が清朝の繁栄の中で穏やかであること、詩人達が楽しんでいることをことさら強調する必要があったのである。参加詩人のほとんどが浙江人であった『西湖修禊詩』には、こうした内容が序に必要だったのである。

また、この『西湖修禊詩』は、詩集として後世に残すことを強く意識していることが序から見て取れる。爵里をつけたのは、後世の記録の中に、詩人がいかなる人物であったかを伝える資料となるものである。序、後序をつけ、詩人と詩を全て揃えて、蘭亭詩集と同じ形式にしたのは、浙江の優れた文学の歴史の記録にふさわしい裁を整えるためである。同時に、当時の浙江文人が置かれた厳しい状況の中で、優れた文人達が詩壇を築き活動したことを記録しようという意識もあったと考えられる。多くの詩人は無位無官であり、個人の詩集を自身の力で刊行する資力もなかった。鄂敏の資金により、杭州詩壇の隆盛は『西湖修禊詩』として残され、詩人の名前も地方の歴史に刻まれることとなったのである。

修禊と地方の詩壇の記録を結びつける意識は、唐代の白居易(772-826)にすでに見える。白居易の「三月三日祓禊洛滨」(『白氏文集』卷四百五十六)<sup>1)</sup> 四部叢刊叢とすべきか???の序に「若不記詠、謂洛無人。(若し詠を記さざれば、洛に人無しと謂わん)」とあり、詩を記録しておかねば、洛陽に詩人なしと言われるであろうと述べている。ここには修禊の記録を、一地方の文学上の人材の記録として歴史に刻もうとする意識がある。官僚が各地に赴任して修禊を開くようになった時、修禊詩集はその地の人材の記録という役割をも担うようになってきたことがうかがえる。こうした流れの上に立ち、後世に浙江という地方の詩人と詩の記録を刻もうとしたのが、この『西湖修禊詩』であると言える。

## 注

- 1) 小尾郊一「魏晋文学に現れた自然と自然観」ロ「蘭亭」の詩『中国文学に現れた自然と自然観』(1962 岩波書店)、釜谷武志「三月三日の詩—兩晋詩の一側面—」(『紀要』

神戸大学文学部 22 号 (1995) は、修禊と詩の歴史的変遷について極めて詳細な考証を行っている。

- 2) 釜谷武志前掲論文。
- 3) 揚州の詩会については、「揚州詩文之会…詩成即発刻、三日内尚可改易重刻。出日徧送城中矣。」(『揚州画舫録』巻八)とされており、同時期の杭州についても、「乾隆初、杭州詩酒之会最盛。…詩成伝抄、紙価為貴。」(『随園詩話』巻三-六四)等と、詩会の詩が刊行されたことを伝える記述が見られる。
- 4) 『国朝杭郡詩続輯』の記述は、編纂時期からみて朱文藻(1735-1806)「厲樊榭先生年譜」を用いていると考えられるが、現存の朱文藻編「厲樊榭先生年譜」(民国『嘉業堂叢書』所収)、繆荃孫重訂朱文藻「厲樊榭先生年譜」(『樊榭山房集』附録(上海古籍出版社 一九九二)ともに「江敬齋源」脱落しているため、ここでは『国朝杭郡詩続輯』を用いる。
- 5) 蘭亭の修禊の参加者数について、『雲谷雜記』には 42 人とし、『世説新語』企羨篇注所引の王羲之「臨河叙」には、詩を賦した者 26 名、詩ができなかった者 15 名、つまり合計 41 名とする。その他人数の異同については、小尾郊一前掲書に詳しい。劉仁本の修禊については、王士禛『静志居詩話』巻二十四に「合甌、越来会之士、得四十二人、同修禊事。」とあり、42 人とする。
- 6) 按鄂文端之子姪、由八比応進士科入翰林者五六人、最著者総督鄂容安及翰林鄂敏、鄂劍也。(『聴雨叢談』巻十一習氣不除利害不同)、「(鄂爾泰)位望隆重。一時無匹。兄鄂礼、弟鄂爾奇、子鄂容安、姪鄂昌、鄂敏等先後頭於朝列。」(『永憲録』巻全統編)等の記述にその様子がうかがえる。八比は八股文のこと。
- 7) 鄂敏序、周京後序とも『西湖修禊詩』一卷(光緒五年丁氏刊本『武林掌故叢編』所収)を底本とする。
- 8) 船津彦彦「清初詩話にあらわれた「溫柔敦厚詩教也」について」『明清文学論』(汲古書院 1993)、廖宏昌「『溫柔敦厚』説在清代詩論中的重整与発展」『清代學術論叢』第 6 輯(2003)はいずれも詩論の立場から清初の「溫柔敦厚」を論じる。
- 9) 釜谷武志前掲論文に、「少なくとも後漢以降、『論語』の「莫春には…沂に浴し」と強く結びつけて、三月三日の行事が捉えられていたであろうことは、三月三日の詩に『論語』のここをふまえた表現が見られる点からも、推測できる。」という。
- 10) 『静志居詩話』巻二十四「劉仁本」では「按、左司結統蘭亭会、与者四十二人、今名氏未能悉考、詩僅存者、左司而外…」として、11 名のみを記す。
- 11) 平岡武夫「三月三日上巳洛滨修禊—白氏歳時記—」『漢学研究』第 16、17 合併号(1978)で指摘するように、『全唐詩』では、これを詩題とするが、那波本では、全唐詩に序とする部分までを含めて詩題としている。

※本稿は平成二十九年～三十一年度科学研究費補助研究 基盤研究(C) 17K02653「清朝康乾年間における杭州詩人集団の詩会活動と地方文献編纂に関する研究」の研究成果の一部である。

*Poems of the Xihu Spring Purification Ceremony as Seen from  
the Prefaces*

—The Record of a Hangzhou Poetry Meeting during the Qing  
Dynasty Period—

Nobuko ICHINOSE

*Department of Business Administration, Faculty of Business Administration,  
Fukuyama Heisei University*

**Abstract:** The Spring Purification Ceremony (*xiuxi*) is conducted by the riverside on the third day of the third month to clear away ill omens. In 353, Wang Xizhi held a poetry banquet at a *xiuxi* at Lanting and compiled a poetry anthology, to which he attached a preface that came to be known widely as the Lanting Preface. Following this, the *xiuxi* became a widespread type of gathering for the literati. Although there is evidence of poetry anthologies having been edited at many of these occasions, few of these remain extant. Among those few *xiuxi* poetry anthologies that have been passed down with their format intact is the one-fascicle *Poems of the Xihu Spring Purification Ceremony*, a record of a *xiuxi* written by Xihu in Hangzhou in the 11th year of Qianlong's reign. *Poems of the Xihu Spring Purification Ceremony* is not only valuable as the record of a *xiuxi*, but it also provides clues about the reality of these provincial poetry meetings.

The *xiuxi* by Xihu was a poetry meeting hosted by bureaucrats and attended by poets from Zhejiang. The anthology contains two prefaces by the bureaucrat E Min and the senior poet Zhou Jing. These prefaces are also sources of information about the status of provincial Zhejiang at that time, the role of bureaucrats there, and the consciousness of regional poets.

In this paper, I use the two prefaces to examine the purpose for holding the Xihu *xiuxi* and why it was recorded.

**Key Words:** Hangzhou, Spring Purification Ceremony, Prefaces